

子どもと遊ぶ大人が見た 遊びの世界

マダガスカルにおけるフィールドワークから

深澤秀夫

ふかざわ ひでお / AA研

マダガスカルの村において子どもも遊ぶ。
大人も遊ぶ。そしてフィールドワーカーも遊ぶ。
ひとつの場の中でそれぞれが遊ぶことは、
共振や共鳴や反響を生む。
遊びは互いを知ることのできる
またとない経験であり機会であった。

観察されるフィールドワーカー

人類学のフィールドワークにおいてはこちらの意図とかわりなく、調査される側もまたその人間をしっかりと観察しているものである。とは言え、こちらの言動の何に驚き注目していたかは、「今だから言うけれど」との山の神からの恐怖の暴露話と同じく、向こうが口を開くまで当人にはわからないものである。

1983年12月から1985年2月まで、マダガスカル北西部の人口350人ほどの村落で定住調査を行った。「あなたがたのことは(言語)と伝承(歴史)と習慣(文化)を学ぶために来ました」と伝えてはいたものの、村人の側からすれば、身体は大人のくせに働くでもなく、結婚するでもない人間、それも(白人)(vazaha)が村をうろうろしていたこと自体が、かなり奇異な出来事だったにちがいない。マラリアに罹患して死にかけたことがあるものの、元来脳天気な性格であるため、田植えをしたり、刈り取った稲の上をウ



私の部屋に遊びに来た子どもたち。

シに歩かせる牛蹄脱穀をしたり、川や池で魚釣りをしたり、山にヤムイモやハチミツや野生動物を獲りにいったりと、1年2カ月の村落での生活は、東京生まれの東京育ちの人間にとって楽しい遊びに満ちていた。

1985年2月、次に来ることができるのは数年先か十数年先かはたまた一生戻ることはないかもしれないとの思いを抱きながら、調査地を後にした。しかし、再訪の機会は思いのほか早くやってきた。京都大学東南アジア研究センター(当時)の高谷好一先生たちが企画した「マレー型農耕文化の系譜—内発的展開と外文明からの変容」の科学研究費プロジェクトに加えて頂き、1986年10月に村を訪れることができたのである。村の人びとの側も、私が「戻ってくる」とは予想していなかったようで、そのためか初回滞在時とはずいぶん違う対応を示した。その一つが、「今だから言うけれど」である。当時50代前半のおじさんからこう切り出された瞬間、「え! 何を言われるのだろう?」と心はかなり動揺し身構えたが、次に出てきたことはの意味が咄嗟には良くわからなかった。

「今度来たガイジンは、子どもたちと遊んでいるよって、みんなよく話をしたもんだ」。

遊びが育む仲間意識

そう言われて思いかえせば、ろくすっぽことはのできないガイジンをまともに相手にしてくれる人間は、勉強と家事の他はいささか時間を持って余り溢れる好奇心を包み隠さない子どもたちをおいて他にはいなかった。そこである日ために油を売りにきた学校帰りの子どもたちに白紙と色鉛筆を渡したところ、ベッドと机を置けば大人2、3人がやっと座ることができる3畳ほど

の私の部屋は、あつという間に子どもたちのたまり場となってしまった。男の子も女の子も背にコブのあるウシを描いてくれたあたりまでは、調査者のエキゾティシズムを満足させてくれた。その一方、女の子たちがこぞって家や人や花を描くことにつまらなさを感じると同時に、男女平等思想を持たない社会の中では権利義務や役割関係における性差が少ない民族と思われただけに、いささかの驚きを覚えた。

また、録音機材に興味津々の子どもたちに、「じゃあ、歌でも唄ってごらん」と言って採った歌を再生し聞かせたところ、「わたしも!」「僕も!」と録音希望者が後を絶たず、おかげで女性たちが祝いの際に唄うオシキ(ôsiky)と呼ばれる歌を労せずにくつも採録することができた。録音した当時はこの歌の重要性に気がつかなかったが、即興の歌詞とそれに続く繰り返しの定型の歌詞の混交から成るこの歌を共に唄うことができるかどうか、婚出することの多い女性たちにとって、互いの同朋性を確認する重要な手段であると共に、それを育む格好の機会となっていたことを後の調査の際に知った。月の明るい風の穏やかな晩に夜遅くまで村内に響いていた子どもたちの歌声、すなわち同じくらいの年齢の仲間たちとの遊びの中からこのような意識が醸成されていたのである。(一緒に唄う子どもたち)(zaza indray mihira)と言うマダガスカル語が、(同輩)を意味するゆえんである。

子どもたちの遊びは、お飯事から縄跳びや鬼ごっこにはじまり、魚獲りやマンゴーなどの野生果実の採取など多岐にわたる。そして忘れてならないことは、米搗ぎや水汲み、年下のキョウダイやウシの世話、田植えや牛蹄脱穀など、子どもに割り当てられた家事さえもが、子どもたちが一緒にな



水汲みをする子どもたち。

ミトゥル・ヌンビ。



子守りをする子どもたち。



魚獲り。



カチャをする男性。

り遊ぶことのできるまたとない場となり機会となっていることである。子どもが3人以上集まれば、そこにはおしゃべり、じゃれあい、からかい、そして時には喧嘩も生まれる。村の子どもたちの遊びの特徴は、時と場を選ばず遊びの道具や形に捉われない融通無碍さにある。

と言うわけで、上記のおじさんの暴露話は、当時29歳の私が「遊んでいた」ことよりも、大人であるべきはずの私が「子どもたち」と共に時間を過ごしていたことの方に村人たちの好奇の目が注がれていたことを物語っていたようである。

知力・体力・ジェンダー

ちなみに村で使われていたソーマ(sôma)というマダガスカル語北部方言語彙は、〈遊び〉と訳されるものの、それは決して子どもたちの専売特許ではない。女遊びや前戯もソーマと呼ばれるが、歌もソーマであり、踊りもまたソーマである。ソーマを語根とした他動詞マンピソーマ(mampisôma)は、〈楽しませる〉、〈面白がらせる〉の意味となり、想像をたくましくすれば、このような心の状態をもたらす行為が、子どもにとってもまた大人にとっても

等しくソーマと呼ばれるのかもしれない。その一方、4列に総計32個の穴のあいた盤に石を置いて動かしながら相手の石を取ってゆく世界的にはマンカラの名で知られるアラブ起源の盤上ゲームであるカチャ(katra)、盤に刻まれた格子状の線の上の駒を動かして相手の駒を取ってゆくマダガスカル独自のゲームであるファヌールナ(fanorona)、これらの対戦型ゲームをすることもソーマと呼ばれる。こちらは昔、婿や敵など相手の性格や頭の良さを測るための手段としても用いられたと言うから、いささか肩に力が入る〈遊び〉である。私もこれらのゲームのルールを覚えて調査地で実践したもの、上級者には絶対に勝つことができなかった。

また、祝い事においてウシを屠る前、あるいはワクチン接種やウシに水田の中を歩かせて田ごしらえを行う蹄耕や牛蹄脱穀などウシが多く集まる際に、青壮年男性が好んで行く〈ウシに組み付く〉と呼ばれるミトゥル・ヌンビ(mitolon'omy)は、暴れるウシのコブや角を掴みながらどれくらい長く一緒に飛び跳ねていられるかを見せる〈遊び〉である。観客、とりわけ若い女の子たちが多いほど、挑戦する男たちの数が増

える。当然のことながら、生身のウシが相手の〈遊び〉であるため、蹄で足の甲を踏まれて骨折したり、囲いに用いられている木とウシの間に挟まれて背中一面に擦過傷を負ったり、ひどい時は角で大腿部や腹部を突かれて即病院送りになるなど、危険と隣り合わせである。しかし、見る者たちをばらはらさせるまさにその点にこそ、この〈遊び〉の真髓がある。

ミトゥル・ヌンビと同系統の〈遊び〉に、男同士が拳で思いっきり殴り合うムレンギ(morengy)がある。決まった開催の機会はない農閑期の〈遊び〉であり、もともとは勝敗をつけずに殴り合い、武術のような攻防の技もとりたてては無かった。こちらも、農耕などで鍛えた筋肉隆々の男たちが馬鹿力をふるうため、鼻や口から鮮血が迸り、歯が欠けて飛ぶのはあたりまえと言う荒っぽい代物である。それにもかかわらず、ここ十年くらいの間に大きな町では女性同士のムレンギが出現し、観客を集めている。町に出ていった姉たちが殴り合うようになって、村に住む妹たちはお花に囲まれた家と家族という女の子特有の絵を変わらず描くのかどうか、いささか気になる今日この頃である。